

P1-058

里子受け入れを望んだ里親の準備

浅井 佳士¹、岩本 美由紀²、加瀬 由香里²¹岐阜協立大学、²明治国際医療大学

【目的】

里子を迎える里親家族は、家族成員の増加に対応するための事前準備が必要になってくる。しかし里子を迎える以前の家族の準備に焦点を当てた研究はこれまで行われていない。そこで本研究では、里子を迎えるにあたり受け入れる家族がどのような準備を行ったかについて検討することを目的とする。

【研究方法】

研究対象者は、養育里親と養育縁組里親の里親経験夫婦とし、実際に行った準備や活用したサポート等についてインタビューをおこなった。研究デザインは半構造化面接による質的記述的研究である。なお研究を行うにあたり研究協力施設の倫理委員会の承認を得た。その後研究対象者には、研究趣旨、方法、プライバシーの保護、結果を本研究以外に使用しない事、研究の参加は自由意志であり、収集したデータからは対象者個人が特定されない事、データの適切な破棄、結果公表を文書と口頭で説明し、同意書に署名を得た。

【結果】

里親の準備として①実際に意識的に準備したこと、②予想外の出来事で受け入れ時に困ったこと、③受け入れに役立ったこと、④振り返って考えると受け入れに必要なと思われることの4項目が明らかになった。①では、「事故予防対策」「周囲との関係調整」「おもちゃの用意」の3カテゴリーが抽出された。②では、「要具の用意」「公共機関の利用の不便」「子どもの成長発達の認識不足」「継続している施設と里子の関係性」「幼稚園の受け入れ問題」の5カテゴリーが抽出された。③では、「早くからの里親会の参加」と「必要物品の入手方法の確保」の2カテゴリーが抽出された。④では「非血縁児の生活への心構え」「受け入れる子どもの条件についての話し合い」「子どもの成長を見据えての準備」「発達障害についての勉強」の4カテゴリーが抽出された。

【考察】

里親家庭が里子受け入れ前に行う準備として、夫婦・家族間の十分な話し合いによる意思の統一、サポート先とのネットワークの構築、子どもの年齢に応じた必要物品の用意、子どもの発達・育児に関する知識の獲得、および非血縁児との生活への心構えを行うことが重要になる。今後の日本の社会的養育推進のためには、里親制度の啓発が進み、子育てを個人のイベントだと思わずに、社会全体で子どもを育てるという意識を持つ必要がある。

P1-059

学童期にある在宅重症児のきょうだい交流
オンラインプログラムの実践報告古屋 悦世¹、鳥居 央子²、小島 ひで子¹、
辻 佐恵子¹¹北里大学看護学部、²元北里大学看護学部

在宅重症児の多くは医療的ケアがあり養育者の負担が大きく、生活を共にする健康な兄弟姉妹（以下、きょうだい）への影響がある。そこで、在宅重症児をもつきょうだい同士の交流の場を提供し、仲間づくりときょうだいが抱える思いの共有を主目的とした交流会を実践した。北米を中心に実践されている心理社会的適応の促進を目指したプログラム Sibshops (Meyer, D. 2007) を参考に、Covid-19 の感染拡大のためオンライン (Zoom) で実施した。

【目的】

きょうだい交流会の評価。

【方法】

1) 交流会の実践方法 対象：児童と保護者から参加希望のあった在宅重症児がいる学童期のきょうだいとし、重症児が利用する関連施設にてチラシを配布し、参加者を募った。期間：2021年11月～2022年1月（毎月1回、日曜9時半～11時）。内容：原則3回参加とし、交流会では体を動かす遊び、好きなもの紹介、クラフト、テーマトークを組み合わせた。各回終了時に参加児童と保護者両者にアンケートを実施、郵送式で回収し、単純集計した。

2) 分析：実践概要についてと、終了時アンケートの集計を実施した。

3) 倫理的配慮：参加希望者と保護者各自に、内容及び自由意思での参加、データの厳重管理、同意撤回可能、プライバシー保護、参加によるメリットとデメリットを紙面と口頭で説明し、同意を得た。実践の公表については、交流会終了後に参加者と保護者それぞれに同意を得た。自由に発言できるよう可能な範囲で個室に近い環境提供を依頼し、発言内容は親や他者に話さないこと、話したくないときは参加しなくてよいことを事前に説明した。

【結果】

参加人数は計4人、延べ7人、各回の平均人数は2.3人、平均参加回数は1.75回、全員初めての参加であった。学年は小学2年生が1名、3年生が3名、男女比は1:1、障害児の医療的ケアは半数が呼吸器装着であった。アンケートでは交流会の目的である仲間の存在への気づきと共通の思いがあることについて、3回目が最も高得点であった。オンライン開催は、参加児童と保護者共に参加しやすいと回答があった。

【考察】

オンライン開催は外出しづらい環境にある在宅重症児のいる家族にとって、参加しやすい方法といえる。回数を積み重ねることで、仲間意識や共通体験や思いを実感できている、継続した交流が必要である。

本研究はJSPS 科研費 18K10445 の助成にて行った。